

原書編集：Rod J. Rohrich, James M. Stuzin, Erez Dayan, E. Victor Ross

監訳：宮脇 剛司, 石田 勝大 訳者代表：西村 礼司

Facial Danger Zones 日本語版(フェイシャルデンジャーゾーン) [Web 動画付] 手術・注入療法・非侵襲機器療法を安全に行うために

書評者：松浦 一登(国立がん研究センター東病院頭頸部外科科長)

最初に本書を手にとった時に「きれいな本だな」といった印象がとて強かった。一見すると美術書のような雰囲気であるが、その表題は『Facial Danger Zones』！

本書は、もともとフェイスリフトを施行する際のリスク回避のために執筆されたものである。我々、耳鼻咽喉科・頭頸部外科医にとってはなじみのない手術手技であるが、顔面神経の走行やその保護、顔面の血管走行に重点を置いた記載がされており、その詳細な記載は顔面・頸部の手術をする者にとって新たな発見を与えてくれる。

本書の最大の特長は美しい絵図と手術写真、わかりやすい解説にある。解剖学的構造は精細なイラストと鮮明な術野写真を用いて示されており、視覚的に理解しやすい。また、各チャプターに二次元バーコードが付されており、動画を通じて手術手技や解剖のキモを確認できる点もありがたい。実際の術野での神経の位置関係や注意すべきポイントを動画で確認できることは、外科医にとって大きな学習効果をもたらすだろう。

頭頸部腫瘍の治療が柱である頭

頸部外科においては、腫瘍切除後の機能温存が重要であり、特に顔面神経の損傷は患者のQOLに重大な影響を与える。本書では、第I章で顔面神経の各枝の解剖学的位置、危険領域(Danger Zones)の詳細な記載と共に、顔面の「層構造」を意識することで神経損傷のリスクを最小限に抑える戦略が解説されている。これは神経温存を考慮した手術計画の立案に大いに役立つ知識であり、形成外科医や美容外科医のみならず、頭頸部外科医にとっても極めて実践的なガイドとなる。

第II章では顔面の血管分布に関する詳細な記載があり、これが顔面皮膚切開を伴う手術において重要な示唆を与えている。動静脈の走行を正確に理解することで、皮膚切開時の血流阻害による壊死を防ぐことが可能となる。特に、頬部や口周囲の血流支配についての知識は、局所皮弁を用いる手術を行う際に有用であり、血行障害を回避するための戦略を立てる上で役に立つ。

最終章では「エネルギーデバイス」に関する解説がなされている。これらの機器は主に美容形成

外科で使用されるものであり、我々が直接使用する機会は少ないかもしれない。しかし、本章で述べられている「安全性を最大限に高める」というフィロソフィーは、頭頸部外科領域においても共通する概念である。

本書を貫いている優れた点は、Safety-IとSafety-IIの視点を自然に包含していることである。従来の「危険を回避する(Safety-I)」という観点にとどまらず、「いかに手術をより安全に、かつ効率的に進めるか(Safety-II)」という視点からの工夫が随所にみられる。術野の展開方法、組織の牽引や剝離の工夫、各種エネルギーデバイスをを用いる場合の安全への配慮など、臨床の場で即座に役立つ情報が盛り込まれている。頭頸部外科領域において機能温存を重視する外科医にとって、本書は解剖学的知識を深めるための優れたリソースであり、手元に置いておく価値のある一冊である。

● A4・頁160 2024年11月
定価：22,000円
(本体20,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05739-4]
医学書院刊